

美々津のまちなみ

見学 平成 27 年 2 月 21 日

記録 足立 正智

美々津には木造塾メンバーの 17 人で平成 27 年 2 月 21 日の朝訪れた。曇り空ではあったがこの季節にしては温かな気温で、さすが宮崎と思わされる。美々津では宮崎士会のメンバー 3 人に出迎えられ、説明を受けながら見学した。

美々津は宮崎の日向市にある海沿いのまちで古くから栄えた。近くを耳川が流れ海に注ぎこむ良港である。国道に並行して大きく 2 本の道にまちなみが連なっている。このまちなみは昭和 61 年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。美々津は江戸時代初期の元禄のころから形成された。九州に産する木材などを畿内に運ぶ廻船問屋が町の発展の原動力となっている。高鍋藩、秋月氏の支配にあって参勤交代にはこの港から出航していた。明治期も町は大いに栄えたが鉄道の開通を契機に衰退が始まった。

町は江戸時代から昭和初期にかけての古い伝統的建造物と近代建築が立ち並び、それらのほとんどはいぶしの黒瓦が葺かれている。瓦は以前は地元近くに窯があったそうだ。すべて一般的な右棧瓦である。各建物の階高は比較的高くとられ、ツシ 2 階と言っても十分に人が立てるだけの高さを持っている。基礎は外壁周りに石を並べ、その上を土で平らかにして土台を敷いているものが多いように見受けられる。ササラゴ下見板張の外壁が目立ち、壁の上部、軒裏を漆喰で仕上げたものが多い。垂木の上に細い丸竹を敷き並べその上に土を載せて瓦を吹いているものもあった。下屋根を装飾された持送りを出している建物が多かったが持送りは「マツラ」と呼ばれる。格子は多くの建物に設けられているが細い部材で組んだものが多い。ムシコ窓の格子間隔が少し広めだったのが印象的であった。瓦は一般的な平瓦が多いがたまに本葺きのものもあった。家並みは妻入りが並ぶのも目立ったが、平入も混在している。時代の変遷で違いが出ているのだろうか。玄関脇にぱったり床几を設けている家も数軒あった。ここでの名称は失念したが島根県の鷺にも見られるものであった。道路は江戸時代から続くものと思われる丸い平石を敷き並べた部分もかなり残している。再整備したのであろう。1 m 程度の高さに石垣を積み、その上に土塀を気づいている屋敷も目立つ。萩にも見られる形式だが、薩摩の知覧などのまちなみと共通する。町には共同井戸がいくつもあった。さすがに大きな家では自家製の井戸が掘ってあったが、共同井戸で水を得ることが多かったのだろう。近くに川は海水混じりと思われるので井戸は生命線でもあただろう。共同井戸の上屋は瓦葺で四方転びの柱 4 本に支えられている。共同井戸の傍には必ず小さな祠が祭られていた。

江戸時代から明治にかけて何軒もの廻船問屋があったそうだが、今はそのままの姿で残るものは少なく、その一つ河内屋が資料館として開放されていた。入口の土間から後ろに続くトオリニワが広めに作られ、建具に仕切られた内側にもう一つ通路状の土間があったのは珍しい。作業用と商売居住用に用途を分けていたのだろうか。帳場などが 1 階には並んでいたが、2 階は天井が低いものの、広い板座敷が 6 部屋ほどあった。それもそれらは下

階の天井に合わせて段を変え、3段階のスキップフロアから部屋を構成していた。天井の低い部屋は立つこともできないから、寝るためだけに使っていたのだろう。貫構造を多用し、仕口は込栓で止めていた。

町並みはそのような伝統的建造物が多く残り、あまり歯抜けがない。非常にまとまった伝建のまちなみと言えるのではないか。いくつかの民家では簡単ではあったが鏝絵も見られた。見ごたえのある、楽しめるまちなみであった。